早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０１３年３月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：中国の大学専攻日本語教育の研究
－文学思想による規定と日本の国語教育からの影響－

申請者氏名：田中　祐輔

主査　細川　英雄　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　宮崎　里司　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　鈴木　義昭　（大学院日本語教育研究科教授）

【本論文の概要】

本研究は，過去から現在にかけ，現代中国の大学専攻日本語教育の教育内容や手法が固定化されている実態を指摘し，これまで潜在的だった種々の要因を顕在化させ，現行の日本語教育が抱える問題点や限界点を解決する糸口を見出すことを目的としている。そのために，中国の日本語教育でこれまで使用されて来た日本語教科書の特徴や作成基準・背景・変遷を調査・考察し，中国の日本語教育が何を教育目標として掲げ，教科書を通して，どのような日本語教育を目指して来たのかを明らかにする包括的な日本語教科書の史的研究を行っている。

本研究は第Ⅰ部～第Ⅳ部までの 4 の部と，13 の章によって構成されている。序章において，研究の背景，問題の所在，研究の目的，研究の方法，本研究の構成，初出一覧，本研究の倫理上の立場，凡例，研究助成，について述べ，第Ⅰ部（第一章・第二章・第三章）では，第Ⅱ部・第Ⅲ部・第Ⅳ部における議論への足場を築くために，現代中国日本語教育 60 年史の歩みを概観し，大学専攻日本語教育が持つ歴史的背景を把握しようとする。第Ⅱ部（第四章・第五章・第六章）では，1960 年代から現在にかけて発行された主要精読日本語教科書の固定化について，国語教科書との関わりという視点から分析・考察し，第Ⅲ部（第七章・第八章・第九章・第十章）では，日本語教科書と国語教科書との異同の詳細，及び，両者の役割について論じ，日本語教科書と国語教科書との包摂関係について指摘している。第Ⅳ部（第十一章・第十二章・第十三章）では，日本語教科書が国語教科書との近似性・包摂関係を保つ形で固定化されて来た要因について考察し，終章では，第Ⅰ部から第Ⅳ部までの研究で得られた結論と，中国の大学専攻日本語教科書と日本語教育の現代的課題，今後の展望について述べている。結論としては，現代中国の大学専攻日本語教育には，「文学思想」とも言える文学重視の考えが根強く存在し，特に高年級段階は教育の目標，内容，手法について日本の「国語教育」の強い影響を受ける形で固定化されて来た側面を持つこと，そして，このことが，日本語教育そのものを基礎段階と高年級段階とに大きく分断し，高年級段階への移行過程に位置づけられた基礎段階もまた，硬直化の煽りを受ける結果を招いたことが指摘できるとする。こうした大学専攻日本語教育の実態から浮かび上がる問題として（１）文学教育への内容的な偏重による弊害が生じていること。さらに，（２）基礎段階と高年級段階とが分断されたことで，教育の目標や内容，手法の硬直化が保持されてしまう構造が生じていること。そして，（３）日本語・日本文化の

規範性の過度な追求には不可能性が付き纏うことを指摘している。

【評価できる点】

本研究は，中国の大学における専門課程の日本語教育について論じたものであり，扱われた範囲は，主として 1949 年，すなわち新中国が誕生してから今日までの 60 年の歴史を周到にして且つ過不足なく辿っている。時代区分も詳密であり，各時期の時代的特色を十分に把握した論考となっている。また，本文に付された脚注も必要十分であり，一般読者にとって理解しにくい事項に関する注釈，見やすい図説等の資料も存分に用意され，圧倒的なボリュームとも相俟って，他者の追随を許さぬ内容となっている。

中国の大学専攻日本語教育は，前提となる基本的な理念や価値観自体に問題を抱えており，新たな価値を創出しなければならない段階にあると言え，問題解決には，現代中国の教育思想にまで掘り下げた深い考察が必要であり，現代中国の日本語教育が何を目指すべきであるのかについての活発な議論が不可欠であると筆者は考えるとする。そのうえで，以下の 3 点は，本論文の基本的な姿勢及びオリジナリティとして評価できよう。

① 綿密な教科書調査とその実態の解明を行った点

② 思想史的な観点を踏まえ，歴史的な背景及び関係を視野に入れている点

③ 以上の 2 点を踏まえつつ，中国の日本語教育が「転換期」にあり，教育の実態を明らかにした上で日本語教育の思想を通時的に問い直し，新たな価値を検討することが急務であることを指摘したうえで，今後の日本語教育研究における意味にも踏み込んだ点

また，これまでは，スキルアップを支援する役割を課せられがちであった「教材・教具研究」に対し，教科書を作成ないし採用するエージェント（代理人）の教科書観や固定概念を読みとる重要性を指摘している点は評価できる。全体的に，明らかにしたい課題は，非常に明確化されており，問題の所在を，複雑化させず，読み手に訴えかけている点は高く評価できる。

【今後検討されるべき点】

専攻日本語教育の内容および手法の固定化に基づく，日本語教科書と国語教科書の

近似性に焦点化しただけではなく，日本の国語教科書を題材にした日本語教科書のあり方を，自らの教育実践の中で，振り返り，今後考察すべき課題を明らかにしている。それを踏まえた上で，以下に挙げる諸点を今後の課題としてほしい。

１　英語教育に関しては，グローバル言語の教育という認識が，日本以上に発達している中国で，なぜ日本語教科書だけは，国語教育と文学教育の二項対立的な捉え方を容認しているのか。英語以外の外国語教育を，多様な世界観を醸成させるという観点からとらえていない傾向がある中国の外国語政策についても，日本語教科書観とあわせて言及してほしかった。大学教育が，エリート教育から大衆教育に変貌しつつある中国では，日本語言語教育の一部が，依然エリート教育養成を目指すとともに，エージェントの固定観念を投影させるジャパノロジストの再生産を助長し，ポストモダン的なアプローチが試みられていない点を，さらに詳述してほしい。

２　今後の研究の視座として，海外の日本語教育を取り巻く状況は，日本の影響を受けながらも，それぞれの国の教育政策，学習動機，対日観といった，異なる文脈の中で変遷することを留意しなければならないが，そのためにも，日本からの一方的な発信だけで，グローバルな日本語教育の発展が望めるわけではないことを喚起すべきであろう。このことは，中国という一地域の日本語教育事情や特性に終わらせるだけではなく，海外の日本語教育という観点から，どのように汎用化させるべきかについても言及がほしい。それは，日本の日本語教育関係者が，今後，海外の日本語教育をどのように見るべきかにもつながるからである。同時に，日本語教育全体の展望に関する具体的な提言の必要性も，今後の課題として残されている。将来，『中国近現代日本語教育史』をまとめる機会があるならば，19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの日本語教育史として論じてもらいたい。

以上，さらに考察されるべき今後の課題は残されているとしても，本論文は，優れた学術研究として高く評価することができる。よって，本論文をもって日本語教育学の博士学位論文に値するものと判断できる。